

## 【はじめに】

私は国際高校に入学してから様々な国際的な問題を知ることができた。その中で一番興味を持った問題が異文化理解だった。世界の文化は地域ごとでどのように違うのかを学びたかった。

しかし2021年の秋に参加した大分県別府市にある立命館アジア太平洋大学(APU)での異文化理解交流研修会がきっかけで探究するテーマが変わった。当時、興味を持っていた異文化理解に関する探究活動のためにAPUの留学生にインタビューを行った。「日本に住む上で不便なことは何か」「別府市は多文化共生が進んでいると言われていたが、その都市で住むことの良い点は何か。」という質問をした。それらの質問に対する答えからいろいろな種類のカルチャーショックについて知った。例えば、ベトナムから来た留学生が日本人学生に対して謝る時に相手の手を握ったが、驚かれたという。しかし、この行為は彼女の母国の文化であり、驚かせるつもりなかった。回答の中にはカルチャーショックに関するポジティブな点とネガティブな点があり、その中でもネガティブな問題がより目立っていた。

このように文化の違いによって生じる問題は、互いの文化の知識が不足しているため起こってしまったと考える。では、どうすれば外国人と日本人との間に起こる文化の違いの問題は解決できるのか。これが私たちの探究テーマだ。

## 【序論】

このような探究テーマのもと、まず異文化の知識を学び、それを周りの友達や学生に広めることを計画した。異文化理解に関わる知識を養うために、地域の交流会に参加したり図書室の本を借りて読んだりした。広める方法として漫画を用いようと考えた。文で伝えようとする、見る人は興味を持ってくれないと私たちは考えたからだ。冊子にその漫画と共に問題の原因と解決方法、また私たちが探究している理由を書き、わかりやすく伝えようと考えた。まず、それを国際高校の中に設置し、その後、その漫画を見た人にアンケートを取って、感想や異文化への興味の変化はあったのかなどを調査をする予定である。高校生のうちからそれらを知ることで、将来海外から来た人たちと働く上で問題が生じることが少なくなると考えた。ただ文を書いたものを見てもらうよりも漫画にして表した方が見てもらう人たちにより興味を持ってもらうことができると予想した。今後は高校内だけでなく、市役所や中学校にも設置していただきたい。

異文化理解には四つ段階がある。第一段階は異文化に触れる機会の少ない小学生までを指す。第二段階は中学校に入学し、英語の授業やALTの先生たちとの交流で異文化に興味を持つことである。第三段階は高校や大学等で異文化を学ぶ知識が増え、実際に海外留学やホームステイを通して自己の文化から外の文化へ出ていく過程で、最終段階は相互の文化の相違点や類似点も理解して異文化を寛容な態度で受け入れることができる段階に達することである。(松倉信幸(1997).「異文化理解コミュニケーションとカルチャーショック」.『鈴鹿短期大学紀要』17巻, pp.73-81.)

私たちは今回第一、二段階の人たちに広めると偏見を持つことなく成長していくと考えた。例えば、日本にいる外国人の全員が日本語を話すことができないということではないということだ。それらの人に間違いのない情報、事実を教えることが最終目標である。

## 【本論】

パンフレットを見た後に、今後外国人に対しての対応を変えようという意識の変化があったか、また先ほど述べた第一、第二段階の人たちに大きく影響を与えると予想するかという問いに対する意見をアンケートを用いて聞きたいと考える。まずは国際高校の同じゼミの生徒たちを対象にするつもりだ。そこから得ることができた意見をもとにパンフレットを改善し、校内の全学年の各教

室に約二週間設置しその後再びアンケートをもとに改善を行うつもりだ。国際高校の生徒は他の奈良県の高校生よりも留学生やALTの先生と接する機会が多い。そのためよりの確な意見を貰えると予想できる。また、彼らが実際に留学生から聞いた嫌な思い出を聞くことができる。インターネットから得ることができる情報よりもより正確である。これらの情報を集めた後に県内のその他の学校や県内の国際交流センターのような外国人と日本人が交流する場所に設置していただく予定である。

アンケート結果では「街中の外国人に対する印象が変わった。」「問題の現状について知った。」という回答を期待している。その先には学校での差別についての授業に対する考え方が変わる未来があると信じている。文化を学んだ上で各生徒それぞれの意見が出てくる。意見交換する機会を設けて異文化理解を深めていきたい。その結果、偏見を持って異文化を学ぶ学生数が減り、それによって生じる問題も少なくなるだろう。

もちろん調査の対象者全員の意見が良い方向に行くとは限らない。「興味を持たなかった。」という回答が来た場合、調査の根本が崩れてしまう。内容を理解出来なければ調査ができない。今の私たちの問題解決は異文化を広めることだ。しかし、興味を持って私たちの探究を理解してもらわないと成り立たないため、誰もが分かりやすい漫画と説明文を作る必要があると考える。これがアンケートから得ることができるであろうネガティブな意見である。

異文化理解能力の習得に関しては、その習得方法及び評価基準共に曖昧である点が多い。また、その定義の曖昧さ故に、異文化理解能力は概念の存在そのものが疑問視されることが多々あり、この能力を証明することは非常に困難であるとされている。上述のように、「異文化理解とは何か」という認識さえもきちんと確立されていない状況の中、教育現場では「国際理解の基礎を培う」という指導要領の目標を追求することが求められているのである。「英語が話せれば、国際交流が出来て、異文化理解も生まれる」というような安易な図式に結び付けられやすい。このような考え方は、1970年代に多く唱えられた「接触仮説2」にあたるが、近年では異文化体験のみが優れた異文化理解や異文化感受性をもたらさないとする説が主流である(Shaules Joseph、Doctor of Philosophy 2007)(竹内愛(2012).「異文化理解能力」の定義に関する基礎研究『共愛学園前橋国際大学論集』,1号.pp.105-112.)。現在、生徒たちが「異文化理解という定義を知らぬまま国際理解の基礎を培う」という指導要領の目標を追求することが求められている。

パンフレットを読んで偏見を持つことなく異なるルーツを持つ人と過ごせる未来があると予想する。相手の文化を理解していると自国の文化と異なる部分があったとしても相手の行動や言動を理解することができる。また、異文化を解釈し、自国の文化と関連付けることの出来る技能と、ある文化と文化的習慣・慣習について新しい知識を得るための能力が身につくと考える。新しい知識を習得するということは新しい考え方や価値観が身につく、海外の人と関わる際に相手の考えを受け入れることができるようになる。そうすることで国ごとの対立が緩和されると考える。他国の文化を尊重し合い、他者を理解することで寛大になれるだろう。

これが実現すると、紛争を防ぐことができるだろう。紛争とは「当事者相互間で、相手方の行為自体に対する働きかけを行う直接的なあらそい(社会過程)」として定義される(六本佳平(1973).『民事紛争の法的解決』.岩波書店,339.)。相手の行為が国の文化を尊重しているならば、それを理解し受け入れなければならない。昨年11月に立命館アジア太平洋大学で行ったインタビューの回答を用いて例を示す。ベトナムから来た女性の留学生に聞いた例を用いる。ベトナムには謝罪の際に相手の手を掴むという文化がある。彼女は日本に来て間もない頃、誤って日本人学生の足を踏んでしまった。その時に、彼女は母国にいた時と同じように手をつかんで謝罪した。その時、日本人学生は日本にはない文化を目の当たりにして驚いた。留学生はいつも通りの行動をしたのにもかかわらず、受け入れてもらえなかったため、ショックを受けた。

この時に、もしお互いがお互いの文化を知っていると発生しなかった問題だと考える。私たちはこのような問題を漫画に表し、その問題の原因と解決策をパンフレットにまとめようとしている。今回の問題の原因は、文化を知らなかったということだ。留学生も日本の大学に入学するのだから、日本と母国の文化の違いを学んでおく必要があった。また、日本人学生も相手の出身国にはこのような文化があるのだなという寛容さを培う必要がある。その寛容さを培うためには、様々な

文化を学び、新たな考え方や価値観を習得し、世界にはこんな文化があるのかと感じなければならない。また、偏見やネガティブなイメージを持つことなく文化を学ぶ必要がある。小学生や中学生などの異文化に触れ始める世代に偏見を持つことなく文化を知ってもらわなければならない。私たちが文化摩擦によって生じる問題の原因と解決策を学ぶことで、彼らが今後海外の人たちと接する上で、どのように関われば良いかを学ぶことができると期待している。

### 【結論】

2021年11月に行われた立命館アジア太平洋大学での異文化交流会でインタビューを行った事を通して、私たちの探究テーマが定まった。その際に様々な文化摩擦による問題を知った。その時に私たちはこの問題解決に貢献したいと考えようになった。その方法として、学んだ問題を漫画として表して、それと共に問題の原因や解決方法をパンフレットにまとめて県内の学校に設置しようと考えた。また、小学生と中学生は英語の授業が始まったり、ALTの先生との関わりが増えたりし、異文化に触れ始める期間である。その世代の彼らに向けて作成することによって、偏見を持つ事なく異文化知識を蓄えることができると考える。そうすることによって、新たな考え方や価値観を修得し、広い視野を持って物事を考えることができるようになる。この取り組みを進めることによって、多くの若い世代の人が世界で活躍できる国際人になれる事を期待している。幼い頃から異文化を学ぶことで、彼らが成長する中で国際系の仕事に興味を持ったり、多言語習得に興味を持つだろう。このことから、日本国内からさらに世界で活躍する人が排出されると考える。国際系問題に興味を持っていないにしても、幼い頃から異文化に触れるとより興味を持って問題解決に貢献しようと考えてもらえるだろう。

もしお互いがお互いの文化を知っていると発生しなかった問題だと考える。私たちはこのような問題を漫画に表し、その問題の原因と解決策をパンフレットにまとめようとしている。留学先での問題のほとんどの原因としては、留学生と現地の人々が互いに文化を知らないということだ。留学生は現地の大学に入学するのだから、現地の国と母国の文化の違いを学んでおく必要がある。また、現地の学生も留学生の出身国にはこのような文化があるのだなという寛容さを培う必要がある。その寛容さを培うためには、様々な文化を学び、新たな考え方や価値観を習得し、世界にはこんな文化があるのかと感じなければならない。また、偏見やネガティブなイメージを持つことなく文化を学ぶ必要がある。小学生や中学生などの異文化に触れ始める世代に偏見を持つことなく文化を知ってもらわなければならない。私たちが文化摩擦によって生じる問題の原因と解決策を学ぶことで、彼らが今後海外の人たちと接する上で、どのように関われば良いかを学ぶことができると期待している。先ほども述べたように私たちは文化を広めようとしている。まずは奈良県内の学校内への設置を目指す。その際の問題としては、学生たちにパンフレットを見てもらえるかどうかである。

### 【おわりに】

将来、私はこのグローバル探究の発展として世界に自分が学んだ文化を広めていきたいと考えている。将来は商社に就職して、商品を広めるとともに、それに関わる文化も同時に広げていきたいと考えている。国特有の文化があるためこの商品が使われていると伝えたい。近年、世界のグローバル化が進んでいる。パンフレットに示されているように文化を理解をしなければ様々な問題が発生してしまう。例えば、日本での常識は海外では非常識になり得る。多様性を認めなければ世界全体のグローバル化が促進されない。協力、協働して互いに高め合う必要がある。

大学ではスペインのアルカラ大学へ留学したいと考えている。そこには多くの留学生が在籍しているため、多くの文化を学ぶことができ、またスペインの文化を自分自身の身で習得することができる。この経験を活かして、将来は実体験をもとに受けたカルチャーショックや新たな考え方や価値観を共有していこうと考える。広める方法として、会社間での取引の際だけでは十分とは言い難い。そこで、私が主催者となって異文化交流会を催したいと考えている。主に一

つの文化についての意見交換会をしたいと考えている。自国の文化との類似点や相違点について話し合いたい。職場内に異なる文化を持つ人たちが集まるのならば、職場内で行っても良い。

異文化交流では積極性が必要とされる。また、語学力がないとコミュニケーションを取ることができない。そこで課題となるのがどのように簡単で、みんながやる気を持って活動できるかである。場の雰囲気や音楽を流し盛り上げたり、グループをたくさん作り、その中でプレゼンテーションを行うなどしていきたい。

政治的に国が対立していても、その国の国民同士がコミュニケーションを取る分には問題はない。敵同士であるという概念を捨てて離さなければならない。そこで寛容さが求められる。その力を身につけて世界中の人々と協力し合い、グローバル化に貢献していきたい。